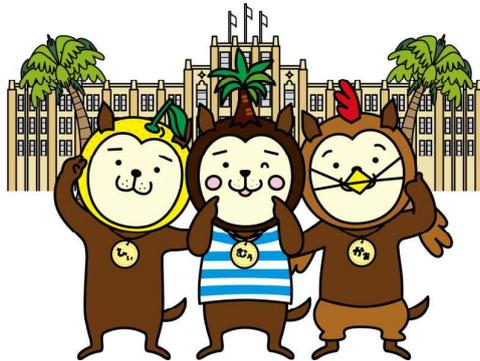


平成28年度「アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり研修会」レポート

平成28年度「アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり研修会」

- 1 目的 変化の激しい21世紀の社会に対応するために、これからの授業は基礎・基本の確実な定着に加え、課題の本質を捉え、周囲と協力して解決策を見いだしていく主体的・協働的な学習・指導方法（「アクティブ・ラーニング」）の充実が求められている。
そこで、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり等の研修を通して、授業実践力の向上を図る。
- 2 期 日 平成28年10月20日（木）
- 3 会 場 宮崎県教育研修センター
- 4 対 象 県立学校教諭
- 5 日程・内容
 - (1) 講義 「アクティブ・ラーニングによる授業改善」
 - (2) 演習 「アクティブ・ラーニングの授業実践に向けて」
 - (3) 講義・演習・協議
「アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり」



平成29年3月 宮崎県教育研修センター

目次

I 演習

「アクティブ・ラーニングの授業実践に向けて」・・・・・・・・・・ 1

II 講義・演習・協議

「アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり」

1	国語	・・・・・・・・・・	3
2	世界史	・・・・・・・・・・	4
3	日本史	・・・・・・・・・・	5
4	地理	・・・・・・・・・・	6
5	公民	・・・・・・・・・・	7
6	数学	・・・・・・・・・・	8
7	物理	・・・・・・・・・・	9
8	化学	・・・・・・・・・・	10
9	生物	・・・・・・・・・・	11
10	外国語	・・・・・・・・・・	12



I 演習
「アクティブ・ラーニングの授業実践に向けて」



アクティブ・ラーニングで「深い学び」を実現させるためには

(1) アクティブ・ラーニングとは

様々な定義がなされていますが、ここでは京都大学教授溝上慎一氏の説明を紹介しします。

一方的な知識伝達型講義を聴くという受動的学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。

能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動の関与と、そこに生じる認知プロセスの外化を伴う。

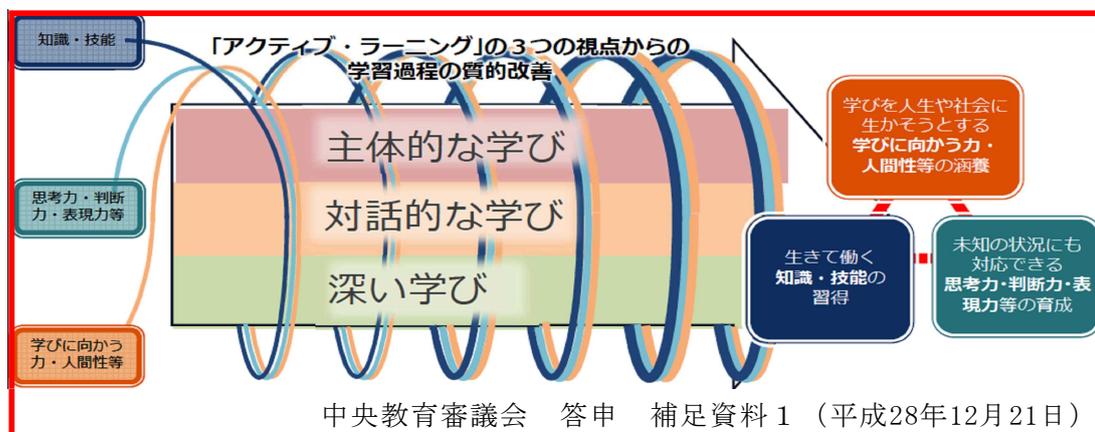
溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂

まず、アクティブ・ラーニングは、高等学校の授業で多い知識の伝達を中心とした講義形式の授業ではありません。また、「アクティブ」という言葉から「活動的な学習」と発想されがちですが、むしろ「能動的な学習」と理解した方がよいでしょう。そのため、授業では学習内容を単に「インプット」（知識の伝達）して終わるのではなく、生徒自身が「アウトプット」（感じたことや考えたことを表現）する場を保障する必要があります。

(2) アクティブ・ラーニングにおける3つの視点からの授業改善

「中央教育審議会」の「答申」では、「アクティブ・ラーニング」の実現のために、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点に立った授業改善が求められています。これらは、アクティブ・ラーニングの授業実践を検討する際、授業分析の「足がかり」になるでしょう。

主体的な学び	学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「 主体的な学び 」が実現できているか。
対話的な学び	子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「 対話的な学び 」が実現できているか。
深い学び	習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「 深い学び 」が実現できているか。



育成すべき資質・能力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」）は、3つの視点を明確にしたアクティブ・ラーニングの授業を繰り返し行うことで、スパイラルに高まっていきます。

(3) 「アクティブ・ラーニング」に対する誤解

アクティブ・ラーニングの広がりとともに、次のような声もよく聞きます。

- ① 特定の教育方法(ジグソー法やワールドカフェなど)を取り入れればアクティブ・ラーニングになるだろう。
- ② 教えることがたくさんあるから、アクティブ・ラーニングだと教科書が終わらない。
- ③ アクティブ・ラーニングをすると学力低下につながる(活動あって学びなし)。



しかし、これらの意見には、次のような誤りがあると指摘できるでしょう。

- ① 「活動的な学習」をすればアクティブ・ラーニングになると考える誤り。
- ② 学習内容を断片的な知識のまま構造化・概念化せずに伝達しようとする誤り。
- ③ 生徒の学力を「知識・技能」の習得という狭い範囲で捉え、「思考力・判断力・表現力等」の実社会で活用できる「汎用的な能力」を含んだものとしてイメージできない誤り。

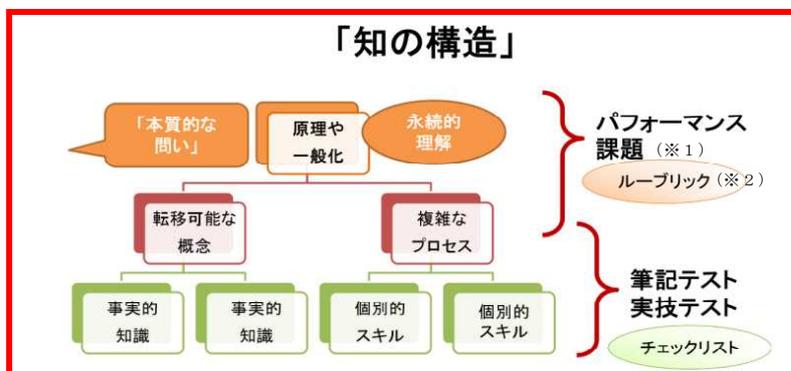
(4) 教科等ならではの「見方・考え方」と「深い学び」の実現

では、「活動あって学びなし」を克服して「深い学び」を実現するためには、どうすればよいでしょうか? 「総則・評価特別部会」(平成28年3月14日)では、各教科等における物事を捉える視点や考え方を、教科等ならではの「**見方や考え方**」と定義し、それが「深い学び」の実現の鍵を握ると説明しています。

- ・ 「見方や考え方」は、知識・技能を構造化して身に付けていくために不可欠である。「見方や考え方」を働かせながら、知識・技能を習得したり、知識・技能を活用して探究したりすることにより、知識を他と関連付けて定着させたり、構造化された新たな知識として習得したり、技能を習熟・熟達させたりすることができる。
- ・ 「見方や考え方」が成長することにより、思考力・判断力・表現力が豊かなものとなり、より広い領域や複雑な事象をもとに思考・判断・表現できる力として育成されていく。
- ・ 学びに向かう力や人間性の育成には、どのような「見方や考え方」を通じて社会や世界にどのように関わるかという点が大きく作用している。

京都大学准教授西岡加名恵氏は、教科等ならではの「**見方・考え方**」は、「**知の構造**」を踏まえたものであると説明しています(『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化)。

西岡氏のカリキュラム論をもとに、「深い学び」の実現について説明するなら、まずは、「教科等の本質に関わる内容」を明確にし、それをパフォーマンス課題を用いたアクティブ・ラーニングで学ばせることで、断片的な知識や個別的なスキルを構造化・概念化したものとして捉えられ、また同時に「汎用的な能力」も育成できるのだと言えるでしょう。



※1 パフォーマンス課題…知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求めるような複雑な課題のこと。

具体的には、レポートやプレゼンテーションなどまとまった作品や実演を求める課題。

※2 ルーブリック…成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価規準表。

Ⅱ 講義・演習・協議

「アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくり」





実践上の課題

- ・ 「対話的な学び」を成立させるための話合いのルールづくり。
- ・ 生徒から多様な意見が出たときの対応の在り方。
- ・ 生徒にとって必然性のある、魅力のある問いの設定が難しい。
- ・ 「問い」を立てる力、適切に集団（グループ）に介入するタイミングなどの指導技術。
- ・ 各教科で身に付ける力（ゴールイメージ）を、教師個人・教科内・学校内で共有すること。
- ・ 生涯学習・カウンセリング・キャリア教育などの視点をもつこと。
- ・ 教師の役割の転換「教科内容の伝達者」→「生徒の話合いのファシリテーター」
- ・ 発達の段階に応じた話合い活動の系統化や、それをどのようにステップアップさせるか。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 評価規準（ルーブリック）を明確に示し、生徒に学習の「見通し」をもたせる。
- ・ 活動時間を確保するために、課題や発問を厳選する。
- ・ 環境づくり・仲間づくりを意識し、生徒が安心して意見を言える「場」を保証する。
- ・ 話合いのスキルを段階的に指導し、他教科のアクティブ・ラーニングでも活用させる。
- ・ やらされ感の大きい読書感想文から、相手意識をもちゲーム性のあるビブリオバトルへ。
- ・ 「ジグソー法」は、グループの役割を経験することで「話す・聞く・書く」の力が身に付く。

今後の取組に向けて

- ・ とにかく、今できることから試行錯誤しながら実践することが大事だと思う。
- ・ 生徒が必要に迫られて、必死に考え、自分の考えをアウトプットすることにより、「深い学び」につながる授業（アクティブ・ラーニング）が可能になる。
- ・ 教師だけでなく、生徒も共にゴールイメージにたどり着ける授業。
- ・ 予習－復習に必然性をもたせ、生徒が自分の学習の「見通し」と「振り返り」を行う。
- ・ アクティブ・ラーニングは「いろいろしないと～」と考えていたが、まずは「脳を働かせている生徒」をイメージして、考えてみようと思わせる発問・授業をつくる。
- ・ 教科において「身に付ける力」（ゴールイメージ）をまず明確にして、授業の「目標」や「プロセス」を自分の目の前の生徒に応じて考えていく。
- ・ 研修会では網羅主義・活動主義に偏った授業を改善していく方向性として、アクティブ・ラーニングの授業を位置付け、「本質的な問い」によって、生徒の「深い学び」が促されるということを学んだ。教材研究の研鑽が必要だと思う。
- ・ 今後、小中学校でアクティブ・ラーニングで学んできた生徒たちが高校に入学してくるので、その生徒たちのこれまでの学びを生かせるような授業を、高校でも実践していくべき。

AL
コラム



【学びの観点】
これまでの**学習観**を**変革**すること

「教える側としての教師、教えられる側としての生徒」という観点から、「生徒は、課題について協働して解決したり追究したりすることで自ら学んでいく。教師は、そのような学びを深める仕掛けを用意する。」という観点に変革することが必要です。



実践上の課題

- ・ 実践方法の切り口が多すぎて、どこまでの授業改善や工夫を行えばアクティブ・ラーニングになるのかが分かりにくい。費用対効果という面からも、点数の向上、生徒や社会が望む力が本当に育成できるか不安である。
- ・ 進学校では進度との兼ね合いや時間の確保が課題であり、準備にも時間がかかる。
- ・ 不登校の経験や家庭的な要因等で、集団活動が苦手な生徒もいる。そのような生徒に、どこまでグループワークを強制すべきか、配慮が難しい面がある。
- ・ 「活動あって学びなし」の授業にならないための、本質的な発問の設定が不可欠と思われるが、検討には膨大な時間をとられることも事実。県内や校内の教科担当者で共有できる場の設定も必要ではないだろうか。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ テーマ史的な特別な内容を1時間扱うよりも、日々の授業で無理なく継続的に扱える授業計画や発問計画を、長期的なスパンから構築することが必要。
- ・ 座学講義が効果的（必要）な単元があれば、AL型が生徒の理解を深める単元もある。科目全体のバランスを見ながら、考査問題の内容まで視野に入れた具体的かつ無理のない計画を立てたい。
- ・ センター試験や二次試験対策をAL型で行うことから始めたい。選択肢の誤りをグループで訂正させる、解説を生徒に行わせる、論述答案を班員同士で比較させてその相違点を互いに指摘しあう等の取組によって、生徒の中では知識が構造化され、思考力・表現力を育成できるのではないだろうか。

今後の取組に向けて

- ・ 「アクティブ・ラーニング」という言葉だけが一人歩きしているようにも感じる。決まった型や手法のことではないと言われるが、実態が曖昧な概念だけに圧倒されて、実践がついてきていない状況に陥っていると思われる。知識構成型ジグソー法のような何らかの枠にまずははめてみて、とりあえず取組を先行したほうが良いのではないだろうか。
- ・ 「必ず行わなければならない」というよりも、その単元の理解を深める上で、最も有効な手段は何かという視点から授業を構築することが必要と思われる。
- ・ 研修で紹介された知識構成型ジグソー法は、具体的かつ明確な手法であり、課題やエキスパート資料が適切に準備できれば失敗しにくい手法と感じた。宮崎県でも、科目ごとの研修の機会を増やし、先生方の授業実践をデータベース化して共有すれば、さらに広まると思われる。

AL

コラム



【ALが目的ではない】 ALを行うことが**目的ではない**こと

グループ学習やディスカッションといった手法・技術の実践を行うことが目的ではありません。主体的・対話的に課題を解決したり追究したりする活動を通じて、生徒一人一人が深く思考する中で、変容することが重要です。



実践上の課題

- ・ 授業進度との兼ね合い … 生徒同士の話し合い活動を入れていくと、授業が進まない。教科書の内容が終わらないのでは。計画的な授業運営。
- ・ 大学入試との兼ね合い … ALと学力向上の相関を示したデータがない。難関私大入試にどう対応するか。
- ・ 学力レベルや中学校までの既習事項の定着の度合に応じた「ゴールイメージ」の設定。
- ・ ALによる学びをどのように評価するのか。その手法。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

【授業例】時代が変わるとはどういうことか。（明治維新を例に）

MQ（メイン・クエスチョン）；「明治維新とは何なのか」

方法；内圧的・外圧的要因の観点からそれぞれ考えてみる。

⇒ 生徒を2グループに分け、教科書・資料集・タブレットを用いて調べる。

⇒ 各グループ発表

⇒ 発表を踏まえて、生徒たちがMQに対してのまとめを行い、意見・答えをつくる。

今後の取組に向けて

- ・ 「何を学ぶのか」（MQ）と「ゴールイメージ」の設定が重要。すなわち、「ゴールイメージ」に応じたMQの発問の仕方や提示資料の精査・準備が重要。
- ・ 生徒が自分で考えて答え（意見）をつくり、生徒同士の対話（他者との協働）を通じて自分の考えや答え（意見）を少しずつ変えてつくり上げていく。「三人寄れば文殊の知恵」
- ・ 自分の考えや答え（意見）を明確にすること = 新大学入試への対応
- ・ 思考過程のアウトプットを前提としたインプットが重要。
- ・ 生徒の主体性を尊重し、生徒と教師の信頼関係、生徒同士の信頼関係が前提となる。
- ・ ALを導入する上ではカリキュラム・マネジメント（精選）が必要。
- ・ 生徒が学ぶ中で、余韻や新たな疑問点が生まれ、次の問いや学習意欲が刺激され、深い学びがなされる。教えすぎない、腹八分のスタンスも必要。

AL

コラム

【講義型の授業や一斉指導型の指導方法も有効】

講義型の授業や一斉指導型の指導方法を否定するものではないこと

ALは、全ての授業において実践されるべきものではありません。ただし、これまでの講義型や一斉指導型の授業においても、ALの要素を取り入れることは可能です。授業の中に、学び合いや生徒がアウトプットする場面を積極的に取り入れていくことが必要です。





実践上の課題

- ・ 「活動あって学びなし」に陥らないような工夫。アクティブ（活動主義）に偏りすぎた結果、単なる活動に終始していたため、深い学びへとつなげるために必要なことを再構築すること。
- ・ 知識の定着（網羅主義）と話し合い等を取り入れた活動（活動主義）との両立。授業の進度が遅くなる、評価の方法が難しいという課題の克服。
- ・ コミュニケーションを取るのが苦手な生徒への対応。主体的な活動に消極的な生徒への手立て。
- ・ 深い学びを実現するためにどんなことが必要か。
- ・ 教材化するのに時間がかかる。思考力の育成のために、資料から気付かせてアウトプットを促したいが、1つの授業のための資料準備の時間が限られているので、教員同士での共有が課題。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 授業のゴールイメージの明確化。共通理解を図り、そのための手段とそれぞれのグループ内の役割を明確にしてもよい。
- ・ ゴールに基づいた評価テストを作成し、その授業内容の研究に励む。
- ・ 常に発表すること（アウトプット）を意識させ、全員がテーマに向かう雰囲気大切にす。
- ・ 知識の定着も大切。「逆向き設計」をする中で、知識・理解の部分と、思考・判断・表現や資料活用の技能をうまく取り入れていく。
- ・ 初期指導を行う。（話し合いのルールづくり、アイスブレイキングなど）
- ・ 単元ごとに「本質的な問い」を考えてみる。
- ・ 「領土・民族」の単元を例に、本質的な問いを考えて意見を出し合った。「なぜ領土問題はなくなるのだろうか。」ということ学習する授業の授業展開を考え、評価問題では既習の地域以外の領土問題を出題し、他の地域での領土・民族問題でも関連付けて思考できているか評価するのはどうかという意見が出た。

今後の取組に向けて

- ・ 最終的なゴール設定をしっかりと設定できれば、充実した教育活動が実践できる。
- ・ 日々の授業や活動を全く新しくするのではなく、まずは自分の授業を振り返り、今何気なく行っている活動に意味やゴールをしっかりと設定する。
- ・ 教科会や教科を超えた枠組みで、生徒をどう導きたいかを研修する。
- ・ 「深い学び」を意識した発問を考える。
- ・ 「振り返り」の場を設定し、その日の学習で学んだことをアウトプットさせ、クラス全員で共有することを意識させる。
- ・ 「しなやかさ」と「したたかさ」を育成するアクティブ・ラーニングにする。
- ・ 社会に求められる人材は、他者とコミュニケーションをとることができ、他者を受け入れながらも、自分の意見を主張し、問題解決を図っていく姿勢を備えた人物である。ALの視点は、授業の中だけにとどまらず、学校生活や家庭生活など、教育のあらゆる場面で活用し、生徒を導いていくことになげたい。
- ・ 今までの教科指導を見直し、これからの授業の在り方を深く考える機会となった。これからしっかりと実行に移す。



実践上の課題

- ・ 専門高校では、資格試験や就職試験などの日程を考慮して時間設定をする必要がある。
- ・ 普通科高校においても、大学入試が変更されていない現状では、（思考や判断以上に）細かな知識を定着させる必要があり、AL型授業では進度が遅くなってしまうため、実施をためらってしまう。
- ・ AL型授業を行うテーマや教材について、身近で、かつ（容易に答えが出せるものではなく）生徒たちがじっくり考える必然性があるものにするべきで、それらの教材選びや授業準備が大変である。
- ・ 2単位科目を担当している我々にとっては、担当クラスが多くなり、そのすべてのクラスでAL型授業を行うのは大変厳しい。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 脳死や臓器移植について、「もし自分の身近な人が脳死になってしまった場合、臓器移植に賛成できるか」というようなテーマで議論する。
- ・ 地方自治について、「国道 220 号線のフェニックスの維持が困難な状況で、これを残すかどうか」、自分たちの街について主体的に考える。
- ・ 経済分野において、「為替相場について、円高・円安のいずれがよいのか」について様々な立場を想定して考えさせる。
- ・ 経済分野において、「高齢化社会における財政再建と消費税UP」など、現在の日本が抱えている問題についてディベートを行う。

今後の取組に向けて

- ・ 2020年に大学入試センター試験が大きく変わることが決まっており、新教科「公共（仮称）」の導入が検討されている。また、社会全体がオートメーション化され、人的労働力がコンピュータや機械に変わりつつある現在において、ますます生徒が主体的に物事を考える必要が出てくると思う。そのような状況を考慮すると、AL型授業は、生徒がこれからの社会を生きていく能力を育てる良い方法だと思う。
- ・ 入試制度や学校現場の多忙さなど、AL型授業を実践していくためにクリアしなければならない課題も多く、今後それらを念頭に更に検討・推進していかなければならないと思う。

AL コラム

【知識・技能の定着にも有効】
生徒が主体的・対話的で深い学びを行う中で、**知識・技能の定着がより図られる**という認識に立つこと

知識・技能を一方向的に伝達しただけで、生徒に身に付くわけではありません。確かな学力とするためには、知識・技能を活用させたり、体験を通して身に付けさせたりするなどの工夫が必要です。





実践上の課題

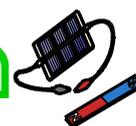
- ・ 進度の遅れや時間の確保。
- ・ (話し合い活動における) 課題の設定の在り方。
- ・ どんな手法がより効果的か。
- ・ 評価をどうするか。(評価が変われば、生徒の取組も変わるのではないか。)
- ・ 主体的な雰囲気づくり。(消極的な生徒もいる中で、どうすれば主体的に取り組むか。)
- ・ 学力差への対応。
- ・ コミュニケーションが苦手な生徒への対応。
- ・ 基礎力の養成も不可欠。基礎力の養成と話し合い活動とのバランス。
- ・ 「答えのない問題に解を見いだす」は、数学には当てはまらない。答えに到達するまでの過程を模索したり、別解を考えたりすることで、深さや広さを実感できる。
- ・ どういう目的で、何を求めていくのか、ゴールを意識させないと、生徒たちだけの活動や議論では、結果に届かない可能性が高い。

アクティブ・ラーニングの工夫(具体化)

- ・ 数式や公式の暗記ではなく、他者に説明できる状態まで仕上げる。
- ・ クラス内だけでなく、他学年との学び合い。
- ・ 小テストのやり方。
- ・ より最適なプロセスを探す。(別解を見付ける。)
- ・ ジグソー法で、自分の学びや考えを、他者に教える、伝える。
- ・ 演習時間を中心にグループ活動を取り入れる。
- ・ 一人で考える時間も大切にしながら、互いに意見を交換していくとよい。
- ・ アウトプットにおいて、知識・技能を定着させていく。
- ・ 生徒が生徒に教える。生徒が生徒に小テストを実施する。生徒自身が問題を作成する。
- ・ 授業の残り5分での振り返り。(小テストやアンケート)
- ・ 起立したまま解説を聞いたり、問いに対して話し合う作業。「立って聞く(話す)」「座って書く」のテンポを重視。

今後の取組に向けて

- ・ できる生徒によっては、もっと深く教えることによって自分の理解を深化させることができ、できていない生徒は、自分がどこができていないのかを明確にするのに適している。
- ・ 教師が教科の魅力が伝えられるようにしたい。
- ・ 生徒に本質的な問いかけができるように、自分自身が数学の本質について考えていきたい。
- ・ 他県での事例を聞くと、これまでの授業形態を変えていくことをより積極的に意識することが大事だと感じた。
- ・ 型にとらわれずに、学力向上につながる手段をつくっていきたい。
- ・ 自分の言葉で、自分の考えを相手に分かりやすく伝えること。
- ・ 進度や生徒の個性などを考えるとグループ学習は難しいと思われる。いかに理解度を高めるか、応用力を養うか、これまでの授業をベースに少しだけアレンジを加えていく。
- ・ 教材の与え方、手法だけでなく、生徒の実態把握や日頃からの人間関係、信頼関係づくりなど、丁寧な仕掛け、事前準備が必要。
- ・ 生徒や集団の可能性を信じること。



実践上の課題

- ・ 分からないことを分からないと周囲に言える雰囲気や、人間関係づくりが課題として挙げられる。生徒の自尊心など様々な要因があると思うが、互いに学び合う集団をつくるためには乗り越えなければならない課題だと考える。
- ・ アクティブ・ラーニングの必要性が教師側に浸透していないことや、講義型授業を望む生徒が少なくないことも課題として挙げられる。教科・科目内、また、学校全体での教師の共通理解の下、生徒がアクティブ・ラーニング型授業の意義や有用性を理解し、受け入れることができるような状況をつくることは、大事なことではないかと考える。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 振り返りシートの活用。授業の最後に具体的な学習内容を各自でまとめることを前提として授業に臨ませることは、自ら学ぼうとする姿勢を引き出し、認知プロセスの外化にもつながるのではないかと考える。
- ・ 発問の在り方。生徒の活動が能動的にならざるを得ない問いかけや、生徒に興味・関心を抱かせて話し合いたくなるような問いかけを、学習内容の本質を押さえて行うことが大事だと考える。
- ・ 実験の在り方。どのような結果になるのかを論理的な思考を基に予測したり、実験結果を物理的に考察したりする活動を取り入れる。実験の前後は、科学的な思考力を育成する場面として最も適していると思うので、生徒の思考や対話が積極的に行われる実験を取り入れていきたい。

今後の取組に向けて

- ・ 生徒が社会人になって、豊かで幸せな生活が送れるように、人としての土台をつくるのが教師の仕事である。その一つの手立てとしてアクティブ・ラーニングがあると思う。
- ・ アクティブ・ラーニングの有用性と効果、社会からのニーズについての教師側の理解や共通認識が、まずは必要だと思う。教師側の本気度は、必ず生徒に伝わる。教師側が本気になるためには、共通理解や共通認識は欠かせないステップではないだろうか。
- ・ 振り返りシートを導入するなど、すぐにできるところから実践して、緩やかにアクティブ・ラーニング型の授業に移行していけばよいのではないかと考える。形式的なものにならないように、意図を考え抜いて実践すれば大きな失敗はないだろうし、少しずつ試していくことが大事ではないかと思う。

AL

コラム



【教師の協働、深い思考、変容】

学びの変革を通じて、**教師自らが協働の中で深く考え、学びを通じて変容すること**

教師同士で現状を分析し、まずできることから始めることが重要です。「これでよい」という正答はありません。常に生徒のために取組を改善し、よりよくしていくことが大切です。



実践上の課題

- ・ 話し合いや教え合いの活動ができるまでに、あらかじめ自分で考え（知識・技能）を構築させるための方法。（基礎・基本となる知識・技能の定着の方法。従来どおりで良いのか。）
- ・ ゴールイメージを校内の同一科目の教師間で共通意識をもち、「チーム」で科目の指導に当たるといった雰囲気をつくる。現状は、その雰囲気に学校間で温度差がある。
- ・ 「なぜアクティブ・ラーニングの視点で授業づくりをすることが大切なのか？」という認識が、まだまだ県内の一教師段階までには、浸透しきれていないように感じる。どのように浸透させるか。今回（10月20日）の研修のような活動を、宮崎県としてもっと推進してほしい。
- ・ 生徒がアクティブになる（話し合い・教え合い・実験・難問に取り組むなどの）場面が大切なことは、理科（化学）の教師であれば、皆、十分に理解している。ただ、単位数と教科書の内容の豊富さの関係で、「時間が無い」と感じている教師がほとんどである。どうやって、時間を確保するかという視点と授業計画の重要性を認識し合うことが重要であろう。
- ・ どの学校でもICT機器が活用できるような環境整備をしっかりと行うこと。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 「こうなりますよ」と、実験を教師が指示するがままに生徒が実行するのではなく、目的に応じた実験方法を、生徒自身に考えさせた上で、実験を行うことができるように工夫する。
- ・ 1つの問題を班で考え、お互いに言葉に出し合い、教え合う過程で思考を深める。
- ・ 教える前に生徒に問題を解かせ、「この問題を解くためには、以前習ったあの知識が必要なんだ！」ということを実感させた上で前に戻り、知識・技能の定着に戻れば、「ただ機械的に覚える！」という「やらされている作業感覚」から、必然性のある知識定着になり、効率が上がる。
- ・ 単元あるいは全学年を俯瞰的に見通した上で、授業計画を行うことが重要。ただだと無計画に授業を行い「時間がなくなったから、実験はやらない」などではいけないだろう。
- ・ 時間短縮できる部分は、ICT機器を活用してテキパキと進め、時間の確保を図る。
- ・ 生徒がイメージしにくい気体の分野や状態変化の分野などで、ICT機器を活用して、動画を生徒に見せる等の工夫で、生徒の理解が早まりかつ深まる。時間短縮にもつながる。

今後の取組に向けて

- ・ 社会は大きく変化している。これからの時代は、色々な価値観の人たちの意見を聴き、協議を進め、より良い解法を見つけて進んでいかないといけない。だからこそ、そのような力・価値観を身に付けた生徒を育て、高校を送り出すことが、高校の教師に課せられた使命と考える。学校生活で最も多くの時間を占める「授業」が、そのような力・価値観をもった生徒を育成する場でなければならない。だからこそ、アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくりを進めていくことが大切になる。
- ・ 自分の考えを述べる場、自分だけで考え抜く場を教師が提供しないといけない。でも、そこに至るまでに必要な基礎・基本の知識・技能をしっかりと付けさせる工夫が必要。教える順番の工夫も、その策の1つと考える。



実践上の課題

- ・ ゴールイメージを明確にしていなかったため、生徒はどこまで達成できればよいのかイメージできていないと思われる。
- ・ 現在は、模試や課題解説のみでALを行っており、内容は単純である。もっと深みをもたせて生徒の力になるような内容を考えていかなければならない。
- ・ 生徒へのAL型授業への意識付けにも欠けていると思われる。
- ・ 協議の中で、ALを取り入れたいが、授業の進度が遅れてしまうこと、テーマの設定が難しいこと等が課題としてある。
- ・ 参加された先生方は、すでに、AL型授業を実践されており、その効果も実感されておられた。ただし、実践する中でいろいろな課題が見つかり、これを一人では解決するのは困難だとも感じられている。ここで思うことは、教師同士も「AL」をすべきで、それは、この研修会のような協議であろう。話し合えば、自分では気付かなかったことに気付いたり、考えもしなかったつながりを知るはずである。生徒であれ、教師であれ、多くの人とコミュニケーションをとることで、大きなミッションにも立ち向かえるというようなことを、参加者全員感じる事ができた。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ ICTを活用し、視覚的に印象付ける必要がある。理・農・工学部などに進学する生徒はプレゼンを行う機会があるため、その際に「説明する力、聞く力、質問を受け止める力」が必要だ。プレゼンで活躍するために、高校の教室で発表・会話する能力がつくよう授業で機会を設けるべきである。
- ・ ICTを活用した授業が印象的であった。
- ・ 学校のタブレットやプロジェクター等を用いた手法など、多くの工夫を学ぶことができた。
- ・ ICTをどう効果的に活用するかは、授業の組み立てと大きく関係する。すべての授業でICTを使えばよいというものではない。あくまでも、生徒の深い学びを促す手段として、どのような教材や教具を利用するのがよいかを、授業者だけで、あるいはチームを組んで検討し、もしその授業でICTが必要であれば使えばよいし、必要なければその他の方法を用いればよいと考える。重要なのは、目の前の生徒に「どのような力」を育みたいかが問題なのであり、その問題解決のためにはいろいろな方法があることを、教師が知っていることが大切である。

今後の取組に向けて

- ・ 多様な社会で活躍できる人間を形成するために必要な授業スタイル。しかし、教師の満足感だけで終わらせないことや、「深さ」のある学びにするための教師の工夫が不可欠でもある。ICTを活用することで、ALを取り入れた授業も随分効率化されるため、教師へのICT研修も同時に進めていくべきだ。
- ・ AL型授業を取り入れてみて、最も変わったことは、生徒の反応がよくなったことだと思う。
- ・ 生徒に話し合わせる時間を設けることで、教師側にも机間指導を行う時間が増えるなど、生徒の活動を観察できるようになった。
- ・ ALは、指導者と生徒にとって、よりよい授業をつくるために必要なことであると感じる。
- ・ AL型授業の必要性については、参加された先生方は感じておられた。後は、どのような実践をすればよいのかである。そのためには、実践事例を、実際にライブで見ることが重要である。そのために、自由に授業見学ができる仕組みや、遠隔地であっても、「テレビ会議システム」等を用いて、実践を参観できる仕組みがあるとよいと思う。



実践上の課題

- ・ 「何を身に付けさせる」のか、「何を感じ取らせる」のかを明確にできていない。
- ・ 授業に参加する生徒の人数やICT機器など、物理的な面の整備も学校ごとに異なる。
- ・ クラスサイズの関係もあり、活動する際に目が届きにくい面がある。
- ・ 単位数の少ない学校では、授業と授業の間が開きすぎることもあり、生徒のモチベーションを維持することが困難である。
- ・ ペアやグループ活動など、英語力があるかないかによって取組に差が生まれている。
- ・ 単なる活動に終わり、現在の大学入試等に対応できる力を付けることができないのではないかと不安がある。
- ・ アクティブ・ラーニングで有効と言われるICT教育のための環境、技術力養成が不十分である。
- ・ 生徒が話したくなるような、表現したくなるような話題・教材の提示ができていない。
- ・ 深い学びや有益な学びに繋がるような明確な意図を盛り込んだ活動を導入できていない。
- ・ 他の意見を聞いて理解したり、それを自分の意見と照らし合わせて再考したりする力が、生徒に身に付けられていない。
- ・ バックワードデザインができていない。(計画的に授業を行えていない)
- ・ CAN-DOリストで目的を明確化し、その学年や授業でやるべき事が明確化されていない。
- ・ アクティブ・ラーニングを実践していく中で、生徒が主体的に取り組むもの、深い学びのあるものになっていない。
- ・ 教職員間の連携がとれていない。

アクティブ・ラーニングの工夫（具体化）

- ・ 事前準備をし、目的を明確にし、授業に参加する生徒が共通理解をもっておく。
- ・ 教科書の内容だけでなく、ジグソー法を取り入れ、少々長めの課題英作文を課し、各グループが作った文章を検証する。(時には、英語を題材にした日本語での活動も)
- ・ CAN-DOリストを校内で見直し、教科内でゴールイメージを共有する。
- ・ ICT機器を上手に使い、生徒のモチベーションを高めながら生徒自らが学ぶ姿勢をつくる。
- ・ 生徒が体験したことや身近なことなどを英語で表現できるように、スピーチやエッセイライティング等へとステップアップできると、主体的な学びに繋がる。
- ・ 授業中の音読等も、単に読むだけではなく、意味をもたせながら読む(内容を把握する、筆者の心情になって読む、新出単語の意味を推測しながら読むなど)ことで、本文の内容等をインプットしやすくなる。
- ・ 教科書の本文中に見付けることができる「一つしかない答え」を求めるような発問ではなく、生徒の「様々な答え」が期待できる「深い問い」を考える。
- ・ 評価規準を明確に生徒に示す。
- ・ 知識の習得にとどまらず、教科書に出てきた学習内容を実際の生活や社会情勢とリンクさせて考えるためにじっくり教材研究を行う。
- ・ 間違いを恐れず、自由に発言し、他人を受容するような雰囲気づくりをする。
- ・ 主体的に学ぶ生徒を育成するために、英語を苦手としている生徒でも何らかの自己表現ができるよう、スモールステップで学べるワークシート等を提示する。
- ・ パフォーマンス課題を設定し、パフォーマンステストを一層取り組む。
- ・ 一見遠回りのように見えるが、ALを推進することで、生徒は学ぶ楽しみを感じ、大学やその後でも自ら学んでいくような生徒にしていくのではないかと。

今後の取組に向けて

- ・ 最終的なゴールをしっかりと設定できれば、充実した教育活動が実践できる。
- ・ 日々の授業や活動を全く新しくするのではなく、まずは自分の授業を振り返り、今何気なく行っている活動に意味やゴールをしっかりと設定する。
- ・ 教科会や教科を超えた枠組みで、生徒をどう導きたいかを研修する。
- ・ 「深い学び」を意識した発問を考える。
- ・ 「振り返り」の場を設定し、その日の学習で学んだことをアウトプットさせ、クラス全員で共有することを意識させる。
- ・ 「しなやかさ」と「したたかさ」を育成するアクティブ・ラーニングにする。
- ・ 社会に求められる人材は、他者とコミュニケーションをとることができ、他者を受け入れながらも、自分の意見を主張し、問題解決を図っていく姿勢を備えた人物である。ALの視点は、授業の中だけでにとどまらず、学校生活や家庭生活など、教育のあらゆる場面で活用し、生徒を導いていくことにつなげたい。
- ・ 今までの教科指導を見直し、これからの授業の在り方を深く考える機会となった。これからしっかりと実行に移す。